

3年目の人工干潟は生き物でいっぱい ～堺^{ゆかい}浜友海ビーチ（堺2区生物共生護岸）

文・写真 村川 智彦(堺2区友海ビーチ自然観察会)

堺浜友海ビーチをご存じだろうか？堺市堺区匠町にある「えんため館」や「堺浜シーサイドステージ」などがある所から更に西の海岸沿いに行った所にあるんだけど、JR阪和線堺市駅から匠町行のバスに初めて乗った。このバスは終点がシャープの工場前のため、ほとんどがリーマンばかりとなる。ラフな格好で娘を連れてバスに乗ると運転手さんから「匠町行きですよ」と声をかけられる始末。20分強揺られて到着。で歩くこと15分くらいで友海ビーチに辿り着く。友海ビーチは管理された場所なので普通の日に訪れてもフェンスに囲まれて入ることはできない。

今日は6月3日。釣り文化協会さんが朝の5時から先行して調査を行っている。やはり朝と晩が一番の釣り頃なのは昔から変わっていないのだ。協会では一番乗りかな？とフェンスの中に入る。潮が引き始めて砂が見えている箇所があった。海は…クラゲがいっぱい！！アカクラゲも発生していてちょっと良くない。早速長靴に履き替え、網を持ってとりあえず区画から排除する。海に入るとモクズガニが逃げている。捕まえた気持ちはあるけど、参加者のために取っておく。捕まえたら喜ぶだろう！！

友海ビーチの生き物一斉調査は総勢59名で行われた。あの空間にこれだけの人数がひしめきあっていたのか？と思うくらいの人数だ。このビーチは季節、時期により捕れる生き物がかなり違う。ってどこでもそうかな？潮間帯にあるビーチな

ので小物が多くて、大きくなると深みへと移動してしまうようだ。昨年来た時にはヤドカリとカニが同じくらいいたと思っていたが今年はカニがやたらと多い。ヤドカリが減ったのか？巻貝が少なく、成長に見合った殻が少ないのが原因か？このヤドカリはユビナガホンヤドカリだそう。ハサミは右側が大きく、脚の先が他の関節よりも長く、脚に縦縞が触角に横縞があるなどの特徴がある。



イシガレイの子どもたち

いろいろな種類の生物がいて、名前テープを貼るのに一生懸命でなかなか他のとこまで目が行き届かない。名前が判ると後の整理は楽だけれども、現場では忙しい！！イシガレイの幼魚がかなり捕れたのでビックリしたのだが、前回の観察会時にはもっと捕れていたと聞いて二度ビックリだった。一度はワカメで失敗したけど、海藻などの隠れ家的なものがあると更に生物相が増えるのではないかと考えている。



最後に大谷先生に解説していただきました



小さな人工干潟に人があふれます

豊かな川と豊かな海が出会う場所～東川(ひがしかわ)河口

文・写真 宮川 訓(海の観察会)

6月7日、東川河口での生き物調査を行いました。東川は泉南郡岬町谷川にある水産技術センターの隣に海に流れ込む川です。

僕は学生時代の1年間を水産技術センターでアルバイトをしていたので、毎日のように東川河口付近を見ていました。しかし、川に降りたこともなく、橋の上から何か生き物がないか探す程度でした。今回、参加したのは毎日見ていた東川にどんな生き物が生息しているのか気になったのがきっかけでした。

現地に集合し、みんなでお昼を食べてから調査開始です。大阪湾海岸生物研究会の大谷先生、水産技術センターの鍋島先生が講師で



まずは、海側の砂利の浜を調べました。



フジツボも色々な種があります。

来てくださっていました。班に分かれて調査をしました。干潮が14時40分ごろということもあり、どんどん潮が引いていき干潟も現れました。

河口ではタマキビ、ユビナガホンヤドカリ、ミズハゼ、ヒザラガイなどがいました。ある岩を見てみるとたくさんフジツボ…。全部同じフジツボかと思いきや、大谷先生に話を伺うと在来のシロスジフジツボと外来のタテジマフジツボが一緒にいるとのこと。見分け方は殻の筋模様はシロスジフジツボは微妙に盛り上がっていて、タテジマフジツボは平らと教えてもらったので触ってみると、なるほど…触ればはっきりわかります。

そのほかにもケフサイソガニとタカノケフサイソガニのメスの見分け方も教えていただきました。ケフサイソガニにはお腹に黒い点が数個あるのですが、タカノケフサイソガニにはありません。参加者のIさんが

「タカノユリは美白美人」と覚えていると言っていて、なるほどと感心しました。

その後、少し川をのぼると、また違った生き物に出会いました。ハゼの子供、ボラ、チチブ、スジエビなど…死んでいるボラにカニが数匹集まって食事をしているところも観察できました。ハクセンシオマネキも生息していて、毎日見ていた川に貴重な生き物も棲んでいたんだと驚きました。足元や、そこら中からパチ、パチ、パチ…とテッポウエビの音もたくさん聞こえていて、血眼で探しましたが結局捕獲できず…。

書いていくときりがありませんが、河口(汽水)という環境は海(海水)と川(淡水)とは違った顔がありました。しかし、海の生き物にも出会え、少し登れば川の生き物にも出会える素晴らしい環境だということに再認識しました。



ちょっと遡るだけでまったく違った生物相に。